

平成28年度 授業研究会実施レポート

西伯郡中学校授業づくり研究会

- 1 期 日 平成28年 6月24日(金) 及び11月24日(木)
- 2 場 所 (両日とも) 岸本中学校コンピュータ教室
- 3 参 加 者 (両日とも) 岸本中学校教職員, 郡内各中学校教員 他
- 4 指導助言者 (6月24日) 岩手県立総合教育センター 研修指導主事 早川貴之 先生
(11月24日) 東京大学大学院教育学研究科教育心理学コース 教授 市川伸一 先生

5 研修内容

(1) 『教えて考えさせる授業』の研究授業及び授業公開【両日とも】

*別紙指導案参照(英語、国語、数学、社会、保健)

(2) 早川先生による指導助言【6月24日】

『教えて考えさせる授業』の考え方をベースに、『深い理解』につながる「構造化された板書」の在り方(『深い理解』につながるために、どのような板書をつくりあげていったらいいのか?)について、以下のように整理していただいた。

①学習課題(目標)の設定

・生徒が見ただけで、授業の見通しが持てるように、学習課題(目標)を設定する。

「どんなもの(対象や場)」を、「どのように(条件)」して、「どうする(行動)」かが示されていること。

※ちなみに、「理解する」は行動ではない。「理解する」は見えないので、見えるように行動させて、理解できたか見極めるようにする。

②自己評価

・書かせたい3要素が書けるような授業にする。書かせたい3要素とは「学習方法・学び方(どう学んだのか)」、「学習内容・知識理解(何を学んだのか)」、「学習意欲(学んだことをどう使うか)」である。従って、3要素を3文で書かせればよい(目安としては、2分程度)。

③学習課題と自己評価をつなぐための板書

・板書には「学習方法・学び方(どう学んだのか)」と「内容知(学習内容・知識理解)」が書かれている必要がある。だから、自己評価で書くことにつながる。

④学習課題(目標)の設定と自己評価の具体例

A 中学3年国語「握手」

●学習課題:「小説『握手』の構成を捉えよう」

↓

改善提案:「(対象や場) 小説『握手』における二重構造がもたらす (条件) 効果を明らかにして
(行動) 批評しよう」

B 小学校2年生国語「スイミー」

●学習課題:「スイミーのきもちをかんがえよう!」

↓

改善提案:「(対象や場) スイミーのこうどうのあとに『心のこえ』を (条件) そうぞうして (行動) かきこもう!」

●実際の自己評価

(例) (学習方法・学び方) スイミーがどんなときになにをしたかを読んだら、(学習内容・知識理解) スイミーの心のこえがわかりました。(学習意欲) そうぞうして読むのがたのしかったので、ほかの本もいっぱいそうぞうして読みたいです。

C 中学1年国語「竹取物語」

●学習課題：「竹取物語をリズムよく音読しよう」

↓
改善提案：「(条件) 竹取物語の音読を繰り返し、音数に注目することで (対象や場) 特有のリズムを (行動) 解明しよう」

●実際の自己評価

(例) 音の数を数えてみたら、同じ音の数のペアがたくさんあった。同じ音の数を繰り返すことで文にリズムやスピード感が生まれるのだと思った。内容だけではなく、音数にも注目することで昔の人の物語にかける思いも読むことができると感じた。次の古典も注目していきたい。

D 中学3年国語「月の起源を探る」

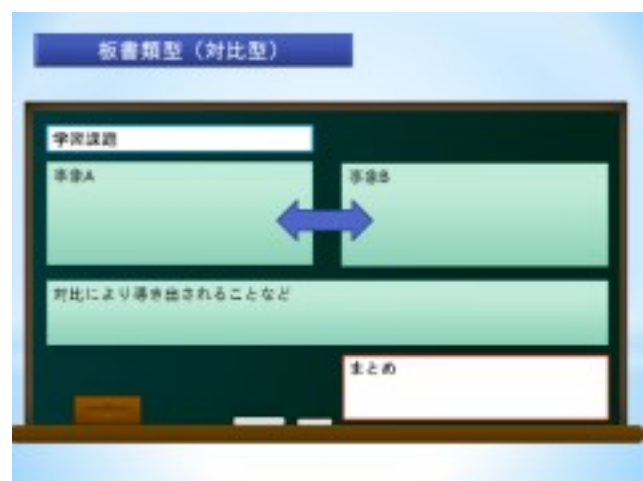
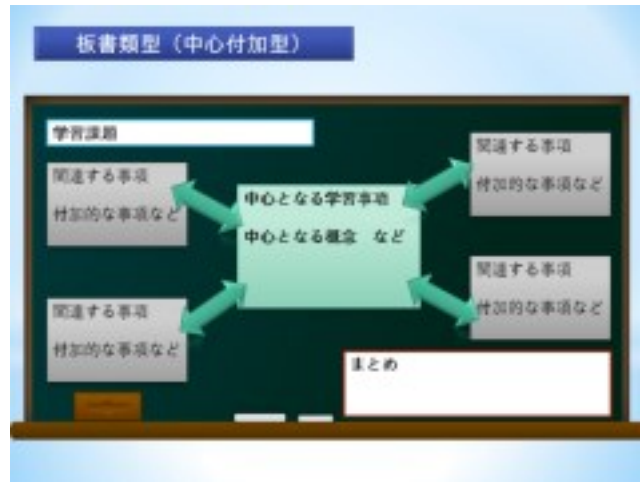
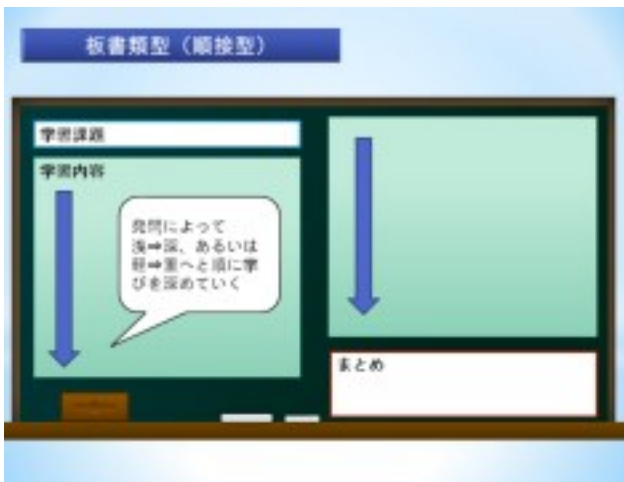
●学習課題：「小見出しや図の役割と効果について説明しよう」

↓
改善提案：「(対象や場) 小見出しや図の有効性について (条件) 本文との関係に着目して (行動) 評価し、説明しよう」

●実際の自己評価

(例) この文章は、図と連携させて説明されているのでとてもわかりやすかった。特に、図では一目で違いを比較させ、文章では図で表しきれない細かな情報を伝えるというように使い分けられているところがおもしろいと思った。私も何かを説明するときに使えそうだと感じた。

⑤板書の4類型



(3) 市川先生による指導助言【11月24日】

本会員の授業について、以下のような御指導をいただいた。

- ・『教えて考えさせる授業』づくりでは、言語活動を通して習得につなげる授業スタイルである。
- ・取得した用語・概念・技能を使いこなすことで、思考・判断・表現の力の育成につながる。
- ・教えたこと（習得させるべき知識や技能）を、何を、どういう順序で、何を使ったら、効率的に教えられるのかを計画する。これが指導案・指導プランを立てる意味である。
- ・困難度（つまずき）査定を行い、つまずきそうな箇所こそ、時間を使う。軽重をつけて説明する。

また、『教えて考えさせる授業』づくりとアクティブ・ラーニングについて、以下のように整理していただいた。

①『教えて考えさせる授業』で伝えたい学び方

- 意味理解** 知識の関連づけを大切にする
- ・断片的な知識や解法の機械的暗記からの脱却
 - ・「そもそも（定義）」「なぜ（理由）」を考える習慣

- 失敗活用** 間違いを活かしながら学ぶ
- ・なぜ間違えたのか、何に気づかなかったのか（教訓帰納）
 - ・失敗は、自分の学習改善のための貴重な情報源

- メタ認知** 自分の理解状態や学習方法をみつめる
- ・理解診断の方略としての説明活動
 - ・この授業でわかったことは何か（自己評価）

②授業づくりのポイント（困難度査定）

- 子どもにとって難しいところこそ、時間と工夫を
 - ・指導書、教育書などの解説を利用する。
 - ・自らの学習経験や指導経験から考える。
 - ・「子どものつもりになって」というイメージーションを働かせる。
- 教える場面の工夫 → コンパクトに重要な点を ※ただし、単なる要約でなく、教材や教え方を工夫
- 理解深化課題の工夫 → 課題のレパートリーを広く
 - ・教科書の発展問題、教育雑誌などの活用
 - ・教師の疑問
 - ・授業検討会で代替案を出す習慣

③『教えて考えさせる授業』における協同学習

- 理解確認 （目的） 教師の教えたことがわかっているか
 - ・類題を解く → 解いたあとの答え合わせや教え合い
 - ・説明を求める → ペアや班で、できるだけ自分の言葉で行わせる
- 理解深化 （目的） 相談しあって協同解決することで、深い学びにつなげる
 - ・自力解決の時間は短めに
 - ・考える材料はていねいに
 - ・「教える」の場面で、解決につながるリソース・ツールの用意
- 『教えて考えさせる授業』で育てたい資質・能力
 - ・「説明する」、「主張する」、「質問する」、「反論する」 ことで、**対話力** **発表力** を育てたい。

④アクティブ・ラーニング焦点化の背景

- 「アクティブ・ラーニング」とは ※1990年代のアメリカの大学教育改革から始まる
能動的・協動的な活動を通じた学習 vs 教員による一方向的な講義形式の授業

●日本での注目

- ・2012年8月 中教審答申(質的転換答申) → 大学教育再生加速プログラム
- ・2014年11月 指導要領改訂への下村文科大臣の諮問 ← 資質・能力の育成方法の一つとなる

⑤中教審とアクティブ・ラーニング

●中教審教育課程企画特別部会「論点整理」(2015.8)

- ・3つの要件 … 主体的な学び、対話的な学び、深い学び
- ・特定の型を普及させるものではない。

●その後の議論→「審議まとめ」に(2016.8)

- ・アクティブ・ラーニングの視点(主体的・対話的で深い学び)を通して、「深い理解」や「資質・能力の育成」、「動機づけの向上」につなげる。
- ・「深い学び」とは、習得、活用を経て、問題解決・構想・創造する活動である。
- ・「深い理解」とは、知識の関連づけ、概念化、活用化ができるようになるということである。

⑥アクティブ・ラーニングとしての『教えて考えさせる』授業の位置づけと意義

●アクティブ・ラーニングをどこにどれだけ入れるのか。

- ・探究的学習は、まさにアクティブ・ラーニングである。しかし、系統的な習得的学習とのバランスが重要ともいえる。
- ・習得的学習の中でもアクティブ・ラーニングの視点は必要である。

教師の教授活動 + アクティブ・ラーニング(理解確認、理解深化) → 『教えて考えさせる』

●アクティブ・ラーニングの問題点と『教えて考えさせる』授業による克服

- ・生徒側の問題 … 浅い関与、浅い理解にとどまってしまう危険性がある。
- ・教師側の問題 … 生徒まかせの授業のなってしまう。同時に、教材研究・指導力低下が危惧される。

6 研修のまとめと今後の方針

(1) まとめ

『教えて考えさせる』授業について、再度まとめておきたい。

「習得すべき内容をしっかり教える(教師の責任を果たす)ことで、その後の問題解決の段階にみんなで取り組め、それによって理解を深めていくことができる」授業理論である。つまり、「知識や技能があつてこそ」「知識や技能を組み合わせる」「知識や技能を使いこなして」というように、「知識や技能は活用してこそ、深く理解できる」と捉えることができる。そして、マンネリ化どころか、追究しようと思えば、どんどん授業改善できるのが『教えて考えさせる授業』づくりという授業理論である。

このような考えのもと、うまくいかない『教えて考えさせる授業』の共通点を以下のように整理したい。

- ①目標やねらいの設定に問題がある
 - ・目標が不明確であり、具体的でない
 - ・困難度査定が失敗した、あるいはなされていない
- ②日常的な取り組みになっていない
 - ・授業形式(4段階)へ機械的にあてはめているだけ
 - ・意味理解を軽視している(深い理解に到達させようという意図が薄い)
 - ・非日常的な実施(授業研のみの実施)
- ③目標と板書、自己評価につながりがない
 - ・自己評価に書かせたい3要素という視点で授業が構成されていない
 - ※書かせたい3要素とは、「学習方法・学び方(どう学んだのか)」、「学習内容・知識理解(何を学んだのか)」、「学習意欲(学んだことをどう使うか)」
- ④「教える」と「理解深化」につながりがない
 - ・教師が教えたことと関連しない課題
 - ・課題遂行中のヒントや板書、支援が用意されていない
 - ・協同活動がはいらず、教師が個別対応しきれず終わる

(2) 今後の方針

三面騒議法を用いた授業検討会では、会員一人一人の学力が定着する授業・習得を目指す授業への理解を深める上で意義ある時間になりつつある。特に、「建設的な代案」「自分の授業ならどう取り入れるか」を考えて発言し合う場面が増えたことに、その変容がみてとれる。

本会では、授業研究会の日に特別な授業をするのではなく、「日々の授業実践で取り組んでいくこと」そのものこそ重要視している。会員一人一人で課題は異なるが、大きく分けると次の7点に絞られる。日常化を推進する意味でも、再度整理しておく。

- ①『教えて考えさせる授業』で、生徒に学び方（意味理解、失敗活用、メタ認知）を伝えようとする視点を持つこと【主体的な学び】
- ②学習課題（目標）の適切な設定
- ③生徒がつまずくだろう点を予測し、教える工夫と手立てを用意しておくこと（困難度査定）
- ④「学習方法・学び方（どう学んだのか）」、「学習内容・知識理解（何を学んだのか）」、「学習意欲（学んだことをどう使うか）」の3要素が板書に書かれていること
- ⑤理解深化の段階で、協同的な学びや問題解決的な学習を積極的に取り入れること【対話的な学び】
- ⑥身につけさせるべき内容をあっさり教えた上で、その内容に関連づけたり、活用したりしながら問題解決や構想・創造できる課題を設定すること【深い学び】
- ⑦自己評価までできる時間配分

あくまで、この『教えて考えさせる』授業は、習得の授業である。「何を習得させたいのか」、「その習得させた内容をどのように説明し」、「深い理解にどうやってつなげていくのか」が重要なポイントであることはいまでもない。次期学習指導要領にも見られるように、「浅い理解から深い理解（意味理解）」につながるような授業を目指し、今後も更に継続させて取り組んでいきたいと思う。